

現場・現実と学会のあり方を考える

私は化学機械製造業（工業材料生産設備）の技術を作り続けることをしながら、製造業の中小企業における経営者としての一面を持ち、化学工学会や粉体工学会の理事、さらには当学会に理事の役目を仰せつかっている。

工学に関わる学会は、いつの間にか実学・実用学・現場を離れ、学問のための学問になってきている。古臭いものの代表として“学会もん”という言葉があるように、研究と言う名の深い狭い、先進的と称する世の中と離れたことを行っている人達を学者・先生と呼んで、一般の人々はそのギャップを楽しんでいる。そして、そのギャップが何とかならないかと思っていた。

そんな時に、社会技術革新学会と言う、現実・現場基点から世の中の動きを見る、特に技術と社会の関係を見ていこうとする学会ができた。それは、現在までの事実に基づいて、これからの方向を考えてみるのが重要であり、これを論文・報文としてまとめ上げることによって、思考に深みをつけ、更なる進歩を期待できる学会である。

学会というと、すでになされた研究、すなわち、我々にとって、最もわかりにくく、具体的に世のためになっていないことが多い行為をベースに更なる研究の保持・促進と後進の教育に力を注ぐこととされる。企業では研究中とは結果を出さないことの代弁ともとられており、開発は結果を出すことが求められている。実社会で経営する者としては研究を少なくとも現場において結果を出すものとして開発と同列に考えたい。

当学会は、そのベースになる“研究対象”を広く工学の原点であるべき技術革新と経済学と社会学の原点であるべき社会変革としている。そして、過去の業績をまとめること、即ち一般の人によくわからない研究でなく、実際に開発したこと、経験したこと、現実にかきたことをまとめ上げ、公表できるようにすることを学ぶことと、これからの方向・考え方を討議し、若手に伝え、教え、継げることを年齢に関係なく行っていくことを期待しているし、進めていきたいと考えている。

これまで学会とは無縁だったと思っていた方々が、真の人間関係や社会の発展、もちろん会社に属する人は会社の真の発展を思って、互いに考え方を学ぶ場を提供することが学会の使命と考えていることを伝えて、多くの若い人たちの参加を期待したい。

理事 大川原 正明